

# 悠久の京を訪ねて Part IV

Vol.6



KYOTO  
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

## 「侘び茶」と朝鮮王朝の陶磁器

### ■茶道の移り変わりとお茶の湯道具

お茶は平安時代に最澄によって、中国から日本へ伝えられ、その後、鎌倉時代には茶西によってお寺を中心に広がったと言われています。室町時代中頃には、貴族や武家の邸宅にある書院広間で、中国製の天目茶碗や青磁碗を用いた茶会が開かれるようになりました。安土桃山時代には、武家や商人の間で無駄を削ぎ落とした「侘び」を主題とした「侘び茶」が流行し、干利休によって一応の完成をみました。「侘び茶」では、簡素な茶室が好まれ、器も朝鮮半島製の粉青沙器碗などが用いられました。中でも、朝鮮半島では日常雑器である井戸茶碗は最高の抹茶茶碗として珍重されました。江戸時代初期には侘び茶の伝統を継承しつつ、華やかさを加味した「大名茶」が本流となり、器は従来のものに加え、美濃焼や唐津焼など彩色や絵付けを施したものが好まれるようになりました。

### ■出土した朝鮮王朝の陶磁器

平成2年に行われた京都府庁内の発掘調査で、地下貯蔵穴とみられる遺構から、数多くの美濃焼・唐津焼の器とともに、朝鮮半島製の器が2点出土しました。これらの出土品は、大

京都府庁



部分が高級食器や茶器と考えられています。

白磁碗は安土桃山時代の大振りの抹茶茶碗で、割れた破片を漆で接着し、大切に使われてきたとみられます。粉青沙器碗は、花模様のスタンプや、彫刻を施した部分に白い土を埋めて模様を表した「彫三島」と呼ばれる朝鮮半島に注文して製作された器です。

調査地は、江戸時代初期の有力な商人の邸宅と考えられ、これらは、国産の器とともに朝鮮半島製の器を好んで用いた町衆の姿を物語っているといえるでしょう。



白磁碗



粉青沙器碗